
緋弾のARIA ~ HSSと並ぶ者

凱斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜HSSと並ぶ者

【Nコード】

N6531X

【作者名】

凱斗

【あらすじ】

中学から武偵をやっている成瀬凱斗だったが一部の人を除いてある能力があることを隠していた。

そんなある日親友のキンジがチャリジャックされてしまう。

その日から凱斗の生活は一転してしまう。

そんな学園の物語です、どうぞよろしくお願いします。(^ ^)

基本的に駄文なので御了承ください。

プロフィール(前書き)

どうも初めまして凱斗です)、、(ノ
中3の落書きだと思って読んで下さい。

プロフィール

初めてなのでとりあえずプロフィール

ナルセカイト
成瀬凱斗

身長178センチ

体重68キロ

血液型AB型

年齢16歳

誕生日1月29日

容姿

髪は黒で目にかかる程度

身長や体重もいたって普通

顔は良い方でよく不知火と歩くと二度見される

ファンクラブも有るらしい

所属

東京武偵校2年装備科

東京武偵校1年狙撃科

神奈川武偵高付属中学強襲科

装備

M92F黒、銀の2丁フルオート、三点バースト改造済

ワルサーWA2000

バスタードソード

バタフライナイフ

性格

男女共に優しいが特に女性には優しく当たっている。

悪人だろつが犯罪者だろつが基本、人には優しいが、仲間を傷付けたりすると容赦ない。

唐変木。

プロフィール（後書き）

次回からは物語に行きたいのでよろしくお願いします（、ー、（ゞ
あと、ここ直した方がいいよ、と思うことがあったら感想までよろ
しくお願いします

始まりの警笛（前書き）

前回のプロフィールから数日…

書き溜めしてました？

でもあまりたまらず…

まあこれも落書きだと思って

読んで下さい（- - -）

始まりの警笛

「いい匂いだ」

朝食を作っている音が聞こえる。

朝から手料理が食べられるなんて我々学生にとって幸せなことなのだろう…

新妻が朝食を作っている…そんな光景

ただ一つちがうのは、エプロンをした可愛い女の子ではなく作っているのが身長180近い男っただけだ。

この男は凱斗、武偵校に通う二年生である

「よし、完成」

「いったっだつきまー『ピンポン』す！」

感動の完成の時に誰だよ。

「はいはいすぐいきまーす」

ガチャと玄関を開けるとそこにキンジがいた

こいつは遠山キンジ、俺と同じ武偵校2年だ

「なんだキンジか、んで何の用だ？」

「お前呑気にメシ食ってる場合じゃ無いぞ！」

「いま7時56分だ」

「うわ、マジかよ？」

確実に7時58分のバスに間に合わないな…

「行くぞ！」

「ちよっ、待てよキンジ」

俺は朝作ったトーストを口に啜えキンジの後を追った。

始まりの警笛（後書き）

どうでしたか？

とんでもない駄文なのでこの文書にムカついたりイライラしたらどうぞ読んでいる端末を割って下さいWW

感想まっています（、ー、（、ゞ

空からの来訪者（前書き）

やっと投稿出来ました。

今回はキンジとアリアの絡みを凱斗視点で見るとは。

暖かい眼で見てやって下さい（・・；）

空からの来訪者

「待てっつてキンジおいキンジ」

「お前の為に初日から遅刻する訳にはいかないからな」
自分だけチャリで行きやがった

「薄情者お〜」

こうなったら武偵校までダッシュで行くしか…
ん？、なんかキンジの後ろからあれは…ええっと…セグウェイだっ
けか、まあいいやそれが追っている。

何かあつたらしい、あのキンジの慌て方、まだスピードを上げている。

そして後ろのセグウェイには人は乗っておらず代わりにUZIが取り付けられている。

UZI

秒間十発の9ミリパラグラム弾をぶっ放す、イスラエルIMI社のサブマシンガンだ。

それがキンジに銃口を向けていた。

「まずいな」

一人でそうつぶやいた凱斗だったが、次の瞬間自分の眼を疑うようなことが起きた

空から女の子が降ってきた

そんなの映画でしか見たことがなかった。だか実際に起きている。しかしそれだけではなく女の子はキンジに向かってパラグライダーで飛んでいる。

体を揺らして方向転換したかと思うと、左右のふとももに付けたホルスターから、それぞれ銀と黒の大型拳銃を二丁抜いた。

空からの来訪者（後書き）

まだ凱斗の能力（？）は登場しませんが次には登場させるつもりです。

次回も読んで下さい。

HSSと並ぶ者(前書き)

今日も順調に投稿出来ました。

どうか読んで下さい(´・`・´・`・`)

今回は凱斗がやっと能力(?)を出します。

お楽しみに

HSSと並ぶ者

倉庫ではキンジがさっきの少女と跳び箱の中に挟まって気を失っている。

「おいキンジ？」

と声をかけてみるも返事がない。

数秒してキンジが

「う……っ。痛ッてえ……」

と言ったので一安心して倉庫の外で待っていると ……

「ヘンタイ……!」

突然中からさっきの女の子の声が聞こえてきた。

どうしたのかと思いきや倉庫の中に入ると、キンジが弁解していた。

「ち、違う! こ、これは、俺がやったんじゃない!」

キンジがそこまで殴られつつ言ったとき。

「……ガガガガガンッ？」

「……何だ？」

キンジ達のはまっている跳び箱に銃撃があった。

何かいつていた女の子だったか……

その前に敵を確認する。

さっきのセグウェイが何台かあった。

7台かこのままでは勝てないな……

やっぱなるしか無いか……

俺は眼の奥でスイッチを切り換える様になつた

フォーマルモード、
に

HSSと並ぶ者（後書き）

どうでしたか？

自分の力が至らないせいで不快な想いをしている人もいるかもしれませんがどうか暖かい眼で見てやって下さい（・・；）

フォーマルモードについては次回に説明がありますのでご安心を。

何か悪い点、良い点がございましたらどうぞ、感想かコメントまでよろしく願います。

フォーマルモード(前書き)

今日はやっとフォーマルモードの説明がちょっと出てきます。

なんかあったら感想までよろしくお願いします。

フォーマルモード

キンジがお姫様抱っこでさっきの女の子を積み上げられたマットの上に乗らせた。

そして俺はキンジに近づき女の子の名札を見ながら言った。

「アリア、姫はその席でごゆっくり、な。銃なんか振り回すのは俺だけで十分だろ？」

俺よ。

今構ってる暇無いだろう。

このモードの時は自分を止められない。

「あ……アンタ……どうしたのよ？ おかしくなっちゃったの？」
というキンジに向けての言葉にかぶせながら――

ズガガガガガガンッ！

また、UZIが倉庫に銃弾を浴びせてきた。

だが防弾のこの倉庫には銃弾は意味がない。

俺は笑いながらドアの方へと歩いて行った。

「あ、危ない！ 撃たれるわ！」

「アリアが撃たれるよりずっといいさ」

俺達は振り返って、赤面しまくっているアリアにウィンクすると――

「アリアを、守る」

ブラックのベレッタ・M92Fを抜くとドアの外に身を晒した。

7台のセグウェイが一斉に銃撃してくるが

その弾は――

当たらない。

当たるわけない。

視えるからだ

今の俺には視える

弾の速さ、質量、角度、その他の情報が。

そして銃弾がスローモーションのように、全部見えてしまうのだ。その弾丸を横にスライド移動しながらよけ、やり過ぎした。

「（眉間から5センチ以内に入れている、いい精度だ。）」

そしてベレッタM92Fをフルオートにし、そのまま右から左へ腕を横に薙ぎながら応戦する。

見なくてもわかる、銃弾の行き先が。

撃った弾丸は4発――

その全てが、銃口に吸い込まれるように飛び込んで行くのも分かる。

ズガガガガンツ？

セグウェイたちはその銃座のUZIのみを吹っ飛ばされた。

俺達の7発の銃弾によって。

「キンジ、やったか？」

「ああ」

キンジは振り返って、倒れたセグウェイを確認すると、倉庫に戻って行った。

キンジに背を向ける様にして倉庫を後にした俺だったが、しばらく歩いていると小走りでキンジが走ってきた。

「キンジ、アリアはどうした？」

「巻いてきた、怒りと羞恥心で冷静さを欠いていたからな」

「とりあえず教務科に事件の報告を済ませようか」

「そうだな」

キザ男同士だと話が続かないことをしつつた凱斗だった。

フォーマルモード（後書き）

凱斗「今回も疲れた」

キンジ「そうだな」

凱「てか、あの駄作者カイト俺たちをこき使いすぎだろ」

キ「まあ俺はほぼ原作通りだからいいけど……」

凱「あまいツツツ？」

キ「うおっ」

凱「あの駄作者カイトはな原作ブレイカーだぞ！ 何時死んでもおかしくない」

キ「マジかクツソあの駄作者カイト」

カイト「駄作者と書いてカイトと読むんじゃない？ 出番減らすぞ」

キ&凱「ああンツ？ 殺すぞ」

カイト「あの〜お二方銃を向けるのは……」

キ&凱「問答無用？」

カイト「ギヤアアアア」

アリアとの再開（前書き）

やっとパソコンの不調が改善され投稿出来ました。

まあこれも落書きだと思って読んで下さい）・・・（

アリアとの再開

事故に巻き込まれて出られなかった始業式の後、教務科に報告を済ませた俺たちが向かっているのは新しいクラス。そこに二人揃ってトボトボ向かっていた。

「ああ、つかれた……またなつたな」

「ああ……」

フォーマルモード。

俺が勝手に呼んでいるだけで本当の名前は知らないが、キンジのヒステリアモードとあまり変わらない。

だから俺はこれをフォーマルモード（Formal Mode）Ver. Attacker 縮めてアタックフォーマルと呼んでいる。

ただ俺は脳の物質を自在に増減させることができる、ある種超偵のような能力をもっているためキンジのヒステリアモード時に分泌される恋愛時脳内物質 エンドルフィンを自分で分泌させてフォーマルモードになっている。

そのためキンジのような発動条件もない。だがこれを使うとキンジと同じく女子を、何かなんでも守りたくなくなってしまう、そして女子に対してキザな言動をとってしまう。

あと一つこれには重要な力が隠されている……
視えるのだ、

知りたいと思つて視た物の質量、材質、速度、角度など様々な情報が……

まあ、あといくつかある能力だが、これが結構使えるのだ。

たとえば怪我をしたとき、アドレナリンを分泌させ痛みを和らげた

り。

怪我の部分だけ血を減らしたりと、脳を使うものならたいのこ
とはできる。

「俺の先祖も都合のいい能力を遺伝させてくれたもんだ」

成瀬家は代々この能力を遺伝させてきた。

この便利な力を……

だがこの力を過信しすぎてはいけない、力を過信するとやられる。

俺の家族がそうであったように……

偶然にも俺とキンジは同じ2年A組になったのだが、これまた偶然
今朝のツインテールさん、ええと神崎？も同じクラスだった……

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

……………はあ？

そんな心の声がキンジとシンクロした気がした。

神崎の指はキンジをしっかりと指していた

そうこうしているうちに、わあー！とクラスの生徒が歓声をあげ
た……もちろん俺たち以外が

「よ……良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来たみ
たいだぞ！先生！オレ、転校生さんと席代わりますよ！」

キンジの手を握りながらブンブン振り回している、身長190近い
ツンツン頭は、武藤剛気。

俺が装備科の頃、無駄に武装したバイクをこいつと平賀と作った仲だ。こいつの特技は乗り物と名のつくものなら何でも運転できるところらしい。

あと武藤、その好意（行為）はキンジにとって有難迷惑だぞ？

「キンジ、これ。さっきのベルト」

神崎はキンジの近くまで歩いて行くとベルトを投げ渡した。

「理子わかった！ 分っちゃった！ これ、フラグばっきばきに立ってるよ！」

そう言っただけ上がったヒラヒラなフリルだらけの制服をきた武偵は、探偵科の峰理子だ。

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！ これ、謎でしょ謎でしょ！？ でも理子には推理できた！ できちゃった！」

確かキーくんってのは理子が勝手につけたキンジのあだ名だったと思う。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！ そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ つまり二人は 熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

理子いらんことを言うな、ここはバカの吹きだまり武偵校だぞそんなこと言ったら……

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間になに？」

「フケツ！」

武偵校は一般科目のクラスとは別に、専門科目のほうで組や学年を超えて学ぶ、よって自然と団結力も高まる。

よって放置しておくと思ノリが過ぎる時がある……

パンツ、パンツ！

だが騒ぎも銃声によって静かになるのである。
真っ赤になった神崎の二丁拳銃によって。

アリアとの再開（後書き）

どうでしたか？

なにかありましたら

また感想までよろしくお願いします

地獄への第一歩（前書き）

大変申し訳ありませんでした。

いや、あのーテストだったんですよ

家はちよつと厳しくて2、3週間前からパソコンが使えないんですよね

だからです。

では本文へ、どうぞ

地獄への第一歩

「れ、恋愛なんて……くっだらない！」

大きく広げた両腕の先の壁には穴があいていた……もちろん銃弾による穴だが。

更に静まった空気に追いうちをかけるが如く排出された空薬莖が金属音をたて落ちた。

理子のバカは固まったポーズのまま移動し着席。

武藤は青ざめ、キンジは驚いた顔をし、硬直状態だった。

ちなみにこの武偵校、射撃場所以外でも発砲してもいいのである。

制限は、『必要以上にしないこと』だけ、よって喧嘩にも銃が使われることもある。

だが、新学期の自己紹介でいきなり発砲したのは、神崎が初めてだろう。

「全員覚えておきなさい！　そういうバカなことを言うヤツには…

…」

「　風穴開けるわよ！」

これが俺の、いや俺たちの地獄の始まりだったのである。

昼休みになり、キンジの周りに人が集まってきたかと思った時にはキンジは一目散に走って逃げていってしまった。

俺も追いかけようとした時……

「カーイト」

不意に誰かが声をかけてきた、振り向いた……誰もいない

「……………幻聴か……………」

そのまま歩いて教室を出る

「カイト」

ちよつと出たところでもう一度声がかかる
振り向くとジャンプしているアリアがいた…

「……………なに、してるんだ？」

「気付かないからでしょっ！」

「さっきのもアリアか？」

「そつよ」

なるほど、背が低くて気付かなかったのか……

「んで、何の用だ」

「ちよつとついてきて」

そういつて俺の制服をつかんで歩きだす、

「どこ行くんだよ」

そう言っても歩みは止まらない

「教務科」

俺たちは今教務科にいる

「で、何をするんだ」

「キンジの資料を調べなさい」

「なんで」

「いいから調べなさい!!!」

資料を保存してあるPCの前に座ってから言う

「はいはい分りましたよ、ホームズお嬢様」

「ッ、なんで知ってるのよ」

「んー、調べた、というか調べてもらった」

そう言っアリアの前に携帯を出す

「ほら、アリアも調べなよ」

そう言っつと渋々アリアも資料を探し始めた。

間もなくチャイムも鳴り、午後の授業を受けた俺たちだった。

順調に授業も進みついに学校も終わった

これ以上ここにいても意味がないので寮に帰った俺が目にしたもの、それは部屋だった物

いや、瓦礫だ。

外から見るとなんの変哲もない部屋だが、中は瓦礫

その辺に転がっていた臯月を起こし聞いた

「なんでこんなことに？」

「……………火薬の調合ミスっちゃって、周のに引火しちゃった……………テ

ヘッ

こいつの名前は大島皐月、『おおしま』ではなく、『おおじま』だとみんなに言っているバカだ。

「『テヘ』じゃねえよお前なんてことしてくれただよ

お前直しとけよ、マジで洒落にならないから……あと部屋に変な改造するなよ」

そう言い残し向かった先は俺の部屋だ、

もうぐつちやくつちやだったが幸い頑丈に作っておいた物入れは無事だったのでそれをそのまま持ち出す。

なんでこんな物があるかって？

よくやらかすんだよヤツは

物入れをレクサスに積み探偵科の寮に行った

なんでこんな4千万近い車を持っているか？

まあ、あれだ今度話すわ

キンジの部屋の前まで来た俺はチャイムを押した。

暫くしてキンジが出てきた

「凱斗か、どうした？」

「ええっと、あのー俺の部屋が皐月に壊されたからここに住みたいんだけど……」

「皐月が？またやらかしたのか……ああ、いいぜ」

「ありがとう」

そう言っただけだった俺だった

地獄への第一歩（後書き）

凱斗「おい駄作者^{カイト}なんでこんなに遅れたんだ」

カイト「とりあえず構えた銃をおろしてくれ」

凱斗「断る、では改めて聞こう、なぜ更新が送れたんだ？」

カイト「テストとかで…」

凱斗「本当は？」

カイト「テスト後も一週間怠けてました」

凱斗「やつぱりかおい、とりあえず殺す」

カイト「wait wait wait wait wait ギャー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6531x/>

緋弾のエリア～HSSと並ぶ者

2011年12月18日09時49分発行